

# 鐵と鋼 第十八年第七號

昭和七年七月二十五日發行

## 論 説

### 製鐵所に於ける A. I. B. 式粉鑛燒結に就いて

(日本鐵鋼協會 第7回講演大會講演)

村上敏雄

ON THE A. I. B. SINTERING SYSTEM OF THE FINE ORES IN  
THE IMPERIAL GOVERNMENT STEEL WORKS, YAWATA.

By Toshio Murakami

SYNOPSIS:- Recently various sintering methods are used, however the A. I. B. Sintering System is one of the most modern down draft system.

In The Imperial Government Steel Works that plant was started 2 years ago. The nominal capacity is 150 tons of sintered ore per day, when treated with mainly purple ore and pyrite cinders.

The author has herewith introduced the present aspect of that system in the world, and described about our equipments raw materials, the result of the sintering operations, on some problems for sintering actions and the final product in our works. Also moreover denoted the consumption of the sintered-ore in the blast furnace burdens. Lastly he advocates that the adequate moisture in the raw materials is one of the greatest important factors for successful sintering operations, it is described as following articles,

(A) on the effect of raw material handling, (B) the action during sintering and (C) the result on the character of product.

#### 目 次

1. 緒言
2. 設備の概要 A. 運搬設備 B. 燒結設備
3. 燒結原料
  - A. 原料の種類 B. 原料の粒度並に化學成分
4. 燒結作業の概略
  - A. 作業の行程 B. 昭和5年度燒結作業

#### の概況 C. 直接作業に必要な人員配置

5. 燒結作用の概略
  - A. 排出瓦斯溫度、負壓、裝入物の表面に於ける風速の變化狀態 B. 排出瓦斯の化學成分
6. 燒結鑛に就いて
  - A. 燒結鑛の品位 B. 配合原料と燒結鑛との化學成分比較 C. 鎔鑛爐に於ける燒





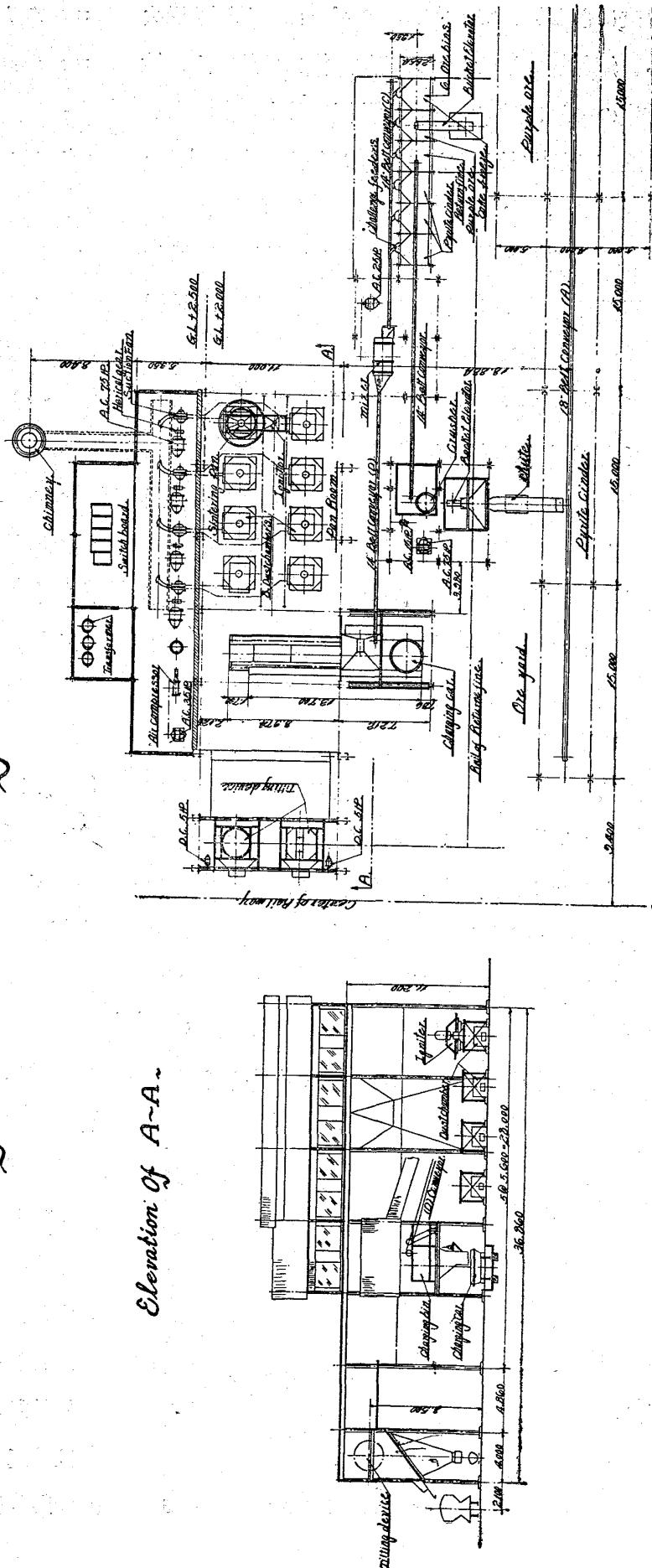


28 基總馬力數は約 645 馬力である。(第 2 表参照)

**B. 燃結設備** 第 1 圖は燃結工場の平面及側面の一部を示したものである、燃結用のパンは燃結室の床上に一列につき 4 基宛 2 列に列び合計 8 基並んで居る、但し其の内 2 基は豫備である。パンは正方形を呈する鐵骨製のパン臺に乗せ此内部には排出瓦斯中のダストを捕集するために内容  $1.8M \times 1.2M \times 1.3M$  内厚 140 mm のコンクリートチエンバーを各パン臺に 1 基宛を備へパンの下部に取付けたるウインドボックスとチエンバーとは鑄鐵製パイプによつて自動的に連絡し煉瓦壁に依つて全く隔離せるエキゾストフワン室との間に鑄鐵製内径 250 mm のパイプを通じエキゾストフワンを通過せる排氣は更にラッパ狀のベンドパイプより煙道に至り各フワンの排氣は合して高 100 呪の煙突より逃出する様になつて居る。

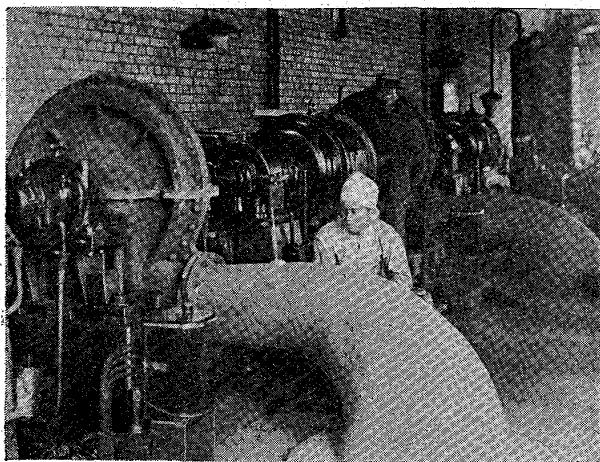
燃結に付せらるゝ裝入物の混合或はこれをパンに充填するには各別所に於て行ひパンの取扱ひは主として上架起重機及び移動裝入車(Charging Car)を使用して居る。パン内の裝入物に點火する場合は走行點火装置(Ignition Apparatus) 1 基(パン室 2 列の

第 2 圖 A.I.B. Sintering Plant at I.S.W., Yawata.

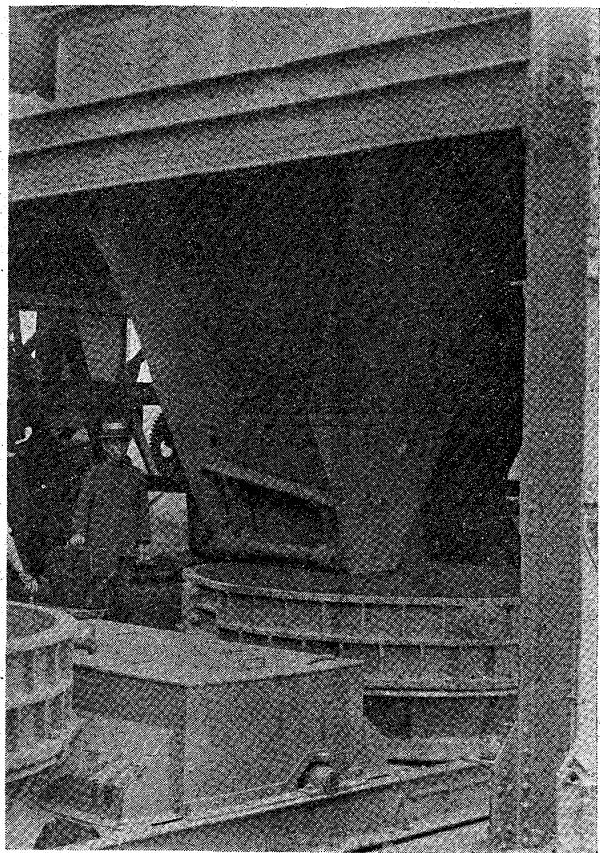




第3圖 Suction Fan



第4圖 Charging Apparatus



數を半減せしめ試験中であるがこれがため Depression は前者の約  $1/4$  内外に遞下して使用電流は  $5 \sim 6$  Amp に下つて居る。(第 3 圖参照)

#### (3) 装入装置 (Charging Apparatus) 1 基 混合原料装入用

本装置は A. I. B. 式焼結装置中最も考案を施してある箇所である、即ち混合原料を貯へる固定式の Charging Bin(装入物貯槽)並に Charging Car(移動装入車)とから構成されて居る。Charging Bin の下部には大略パンの半径に相當する長さの Conical Sector 状を呈する Discharge Trap を付し電動式ギヤー装置に依つて容易に開閉する仕掛けになつて居る。Charging Car の兩端には各 1 基のパンを乗せボールベアリング装置を以てパンを容易に水平に廻轉せしめる。Car の中央部にはトラベル及びパンの廻轉用として電動式ギヤー装置を備へクラッチによつて左右兩パンの廻轉を任意に轉替し得る様になつて居る。トラベルの速度は  $40M/min$  旋廻速度は 1 R.P.M. である。パンに混合原料を装入する場合は上述の Charging Bin の直下にパンの中心部を置きこれを水平に廻轉させながら Discharge

Trap を静かに開く時はパンの廻轉につれて混合原料は落下填充され 1 廻轉にて全く均一に装入を行ひ得るのである、装入加減はパンの廻轉速度及び Trap の開閉度に依つて自由に調節することが出来る。(第 4 圖参照)

#### (4) 混合装置 (Mixer) 1 基 配合原料混合用

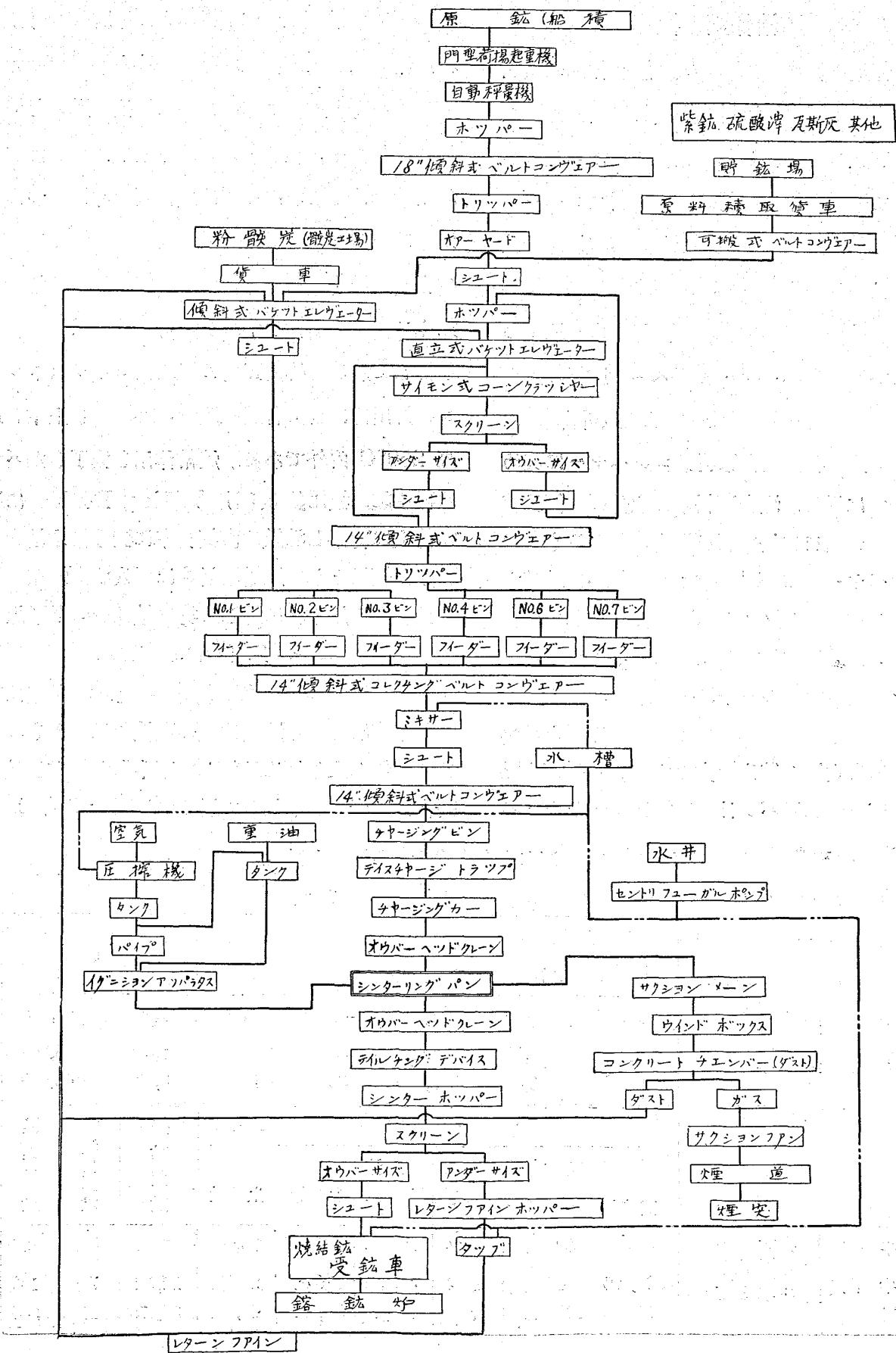
本装置は直徑  $1.5M$ 、長さ  $3M$ 、肉厚  $12.5mm$  の鋼板製圓筒にして配合原料の攪拌を容易にするため其内側に數枚のスパイラル状に取付けたる山形鋼製の Baffle Plate 及び排出口部には直徑  $25mm$  長さ  $1,000mm$  の丸鋼 8 本を嵌入す圓棒を付して居る。傾斜度は  $2^\circ$  にして圓筒は前後各 2 箇の Roller 上に支へられて廻轉する。廻轉數は  $18$  R.P.M. とし  $25HP$  交流電動機に依つて居る。Mixer の入口には原料中の水分調節用として給水管を附して居る。







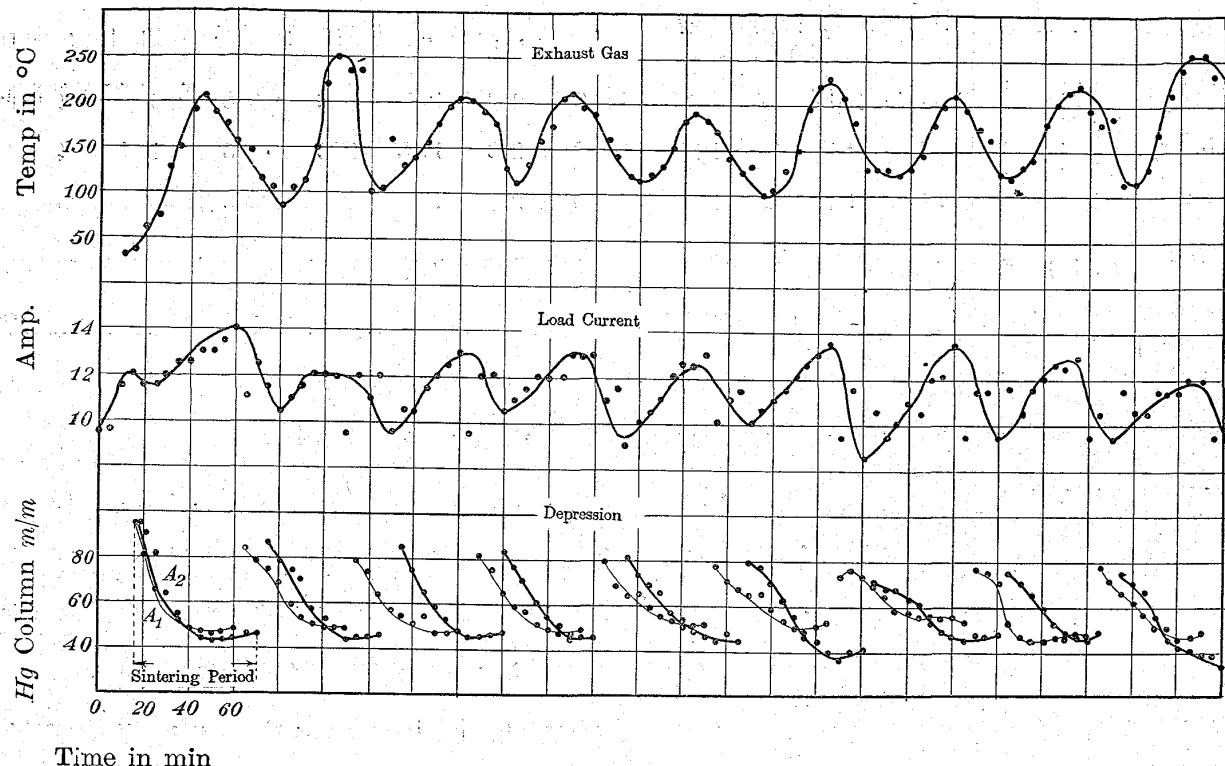
第 6 圖 八幡製鐵所 A. I. B. 式粉鑄燒結作業系統 (昭 6. 2)







第 8 圖 排出瓦斯溫度、負荷電流、負壓變化曲線圖



に依つて必ずしも一定ではないが、今其一例に就て説明すれば先づフワンが 3,000R. P. M. の場合では第 7 圖、第 8 圖に示す様に負壓は點火直後より大體 20~30 分許りで殆んど一定の壓力迄降下し其以後は格別變化を認め難い。即ち、斯様な状態となればパン内の着火層は既に下部の Grate 面迄到達しこれ以後はパン内の焼結物が主として外氣の吸引に依つて冷却收縮の現象を生じて来る、然しサクションフワンの出口に於ける排出瓦斯の溫度は測定の結果から見ると點火後約 10~15 分の間は連續的に遞下し其以後は急激に上昇し初める様である。而して負壓が略一定するに至れば排氣溫度は略最高點に達し以後漸次降下の経路を辿つて居る、排氣瓦斯の溫度が點火直後に於て一時的降下の主因は裝入物の表面より導入される外気が新らたに點火を終つたパン内の着火層を通過し前回の作業中相當加熱されて居る、チエン

バー・サクションパイプ及びフワン内等を通過するに當つて排出瓦斯の有する熱を奪はれ或は裝入物中の濕分の乾燥等に基因するが故であつてウインドボックス内より排出さる瓦斯は事實上時間の經過と共に極めて緩慢乍らも溫度の上昇を見るのが當然である。裝入物の持つて居る濕分が乾燥の進行につれて漸次着火層の厚さを擴大するに至らは急速的に排出瓦斯の溫度を上昇するものと思惟されるのである。以上の現象は嘗て筆者等がダウンドラフトに依り數種の粉鐵鑛、砂鐵等に就き實地燒結試験を行つた場合でも同様の結果を認めて居る。(昭和 2 年 11 月製鐵所研究所著者報告第 29 號参照) 恐らくこの現象は一般この方式による燒結法では何處でも認められて居ることであらう。即ち實地連續作業時に於て斯様な現象を生ずるのはつまりパンよりサクションフワンの排出口部に至る迄の各部の加熱溫度と着火後に於ける













に裝入物中に水分を含有して居る時は、其水分の蒸發に要する熱量は點火用瓦斯液體燃料或は裝入物中の炭素質燃料等が結局損失となるのではないか？と云う様な疑問が必ず直接念頭に浮んで来るが然し水分が、適量混入して居る場合には事實上はこれと全く反対で表面より完全に點火し最初重油又は他の適當なる火焔にて僅かに點火時間が1～2分でも表面から 20～30mm の鑛層迄もよく高熱を得られる。この結果として燒結完了後に於てはパン全體の裝入物が完全なる一つの塊成鑛となり表面に於ける不燒結部即ち返粉となるべきものは著しく減少して来る。従つて裝入物の炭素質燃料量は著しく節減し得られ短時間で點火を完了せしめ得る利益がある。今此を實際作業時に就て考察すると水分が混入して居ない場合若くは極めて少量の場合ではパン内の裝入物を通して行はれる、吸氣作用といふものは鑛層の密度が非常に大きいために點火前に於ても局部的に吸氣の不同が生じて裝入物全體が下方に壓下さるゝ現象は益々甚だしく負壓は頓に上昇して来る、而も點火後に於ては通氣不良に原因する所謂膠着層を鑛層中に生成し易く燒結作用の進行を著しく阻害して塊成鑛の歩留りは極度に遞減するに至る、即ち鑛層中に混在する水分は鑛層密度の調節に役立つのみならず、燒結層の移下状態を調節し得る働きがあるのである。故に例へ外部的に高熱を與へんとしても水分が不足の場合は徒に其高熱を下層に散逸せしめ局部的に熱を集中せしむる事は甚だ困難となる。實地作業時に於いて水分が適當の場合は上層より堅實なる燒結塊を得らるゝに反し水分不足の場合は上層の裝入物は殆んど返粉となり、所謂不燒結部或は受熱不良に基因して脆弱なる燒結塊を

生成し表面より數 10mm の鑛層部に於て漸く堅き燒結層を見ることがあるのは操業不良の際時々遭遇する所である。但し以上の現象は水分の適不適量に關する許りでなく混入炭素質燃料量並に其發熱量、原料の粒度、裝入加減等の如何に依つて其影響甚大なるは勿論の事である。

今一例を掲げてこれを説明すると吾人が卷煙草を喫煙する際若し吸煙激しき時或は點火不均一又は煙草中に纖維等を混する場合には屢片滅りして均一に點火が出来難くなる。かかる場合にこの部分の包裝紙の周圍を適度に濕せば燒失は均一となり、紙片が全く乾燥しない間は決して煙草の燃焼が不均一に進行しないと全く同理である、又鍛冶場のホドに於て熾熱石炭或はコークス、木炭等の周圍に水を撒布する時は外周に擴大せんとする着火の現象を防止し熱を局部的に集中せしめ得るのは其適例で衆知の事實である。

(4) 炭素質燃料の燃燒速度並に燒結溫度を調節し得 裝入物の配合、裝入加減其他燒結を行ふ以前の處理法が大體一定のものとするならば、前述第3項の理由に依つて裝入物中の含有水分の如何は直接其結果として燒結作用の進行速度を自ら調節し得るは首肯し得らるゝ筈にして且つ又燃燒速度の遅速に依つて炭素質燃料又は硫化物等の酸化發熱に依る發生熱量を裝入物に與ぶる狀況も自由に加減し得らるゝのである。即ち下方吸氣式燒結法に於て最も注意すべきは、加熱溫度並に燃燒速度（炭素質燃料の燃燒に依つて生ずる高熱層の移下速度）即ち裝入物の各鑛層に於て燒結に付せらるゝ溫度に保定せしむる時間をどの程度に行ふかにあると思ふ。然し硫化鑛を多量に含有して居る浮選銅鑛或は優先浮游鉛鑛の燒結に於ける如く

原料自體が極めて微細で而もセルフバーニングに對して役立つ硫化物の含有量が相當ある場合には裝入物の點火は案外容易で、而も添加燃料に就いては比較的問題視する程でもないが、當所の如く硫酸溼、紫鑛中の殘留硫黃分が僅少で主として硫酸鹽の形で介在して居る場合には實際上熱源としては餘り其效果はない。さればこれに加ふる炭素質燃料の品位、粒度、配合割合等は實に燒結結果に對して直接重大なる影響を及ぼすのである。即ち鑛層の各部が吸引される外氣に依つて着火發熱しこのために裝入物が加熱せらるゝ時間といふものが實際上極めて短時間にて終了せしめる。本燒結法に在りては燒結の萬全を期するがため少くとも主原料自體の熔融近くの加熱溫度を必要とし而もこの溫度に曝露する時間の適否に依つて其成果を決し得るものと堅く信する者である。但し可熔性鑛溼を作り易きものを多量に混ずる場合はこの限りでない。即ち從來燒結原料中に混入する炭素質燃料に就ては出來得る限り粒度の小なるものを尊び、少くとも其粒度は  $1/8''$  以下とすべきであると提唱されて居る所もある様であるが、上述の如く燃燒溫度(即ち裝入物の加熱せらるゝ溫度)並に裝入物が最高溫度に加熱保定せらるゝ時間の兩者より考ふる時は單に此等の粒度のみに依つて燒結の良否を決せらるゝものではなく實に作業中於ける負壓の狀況パンの深さ、原料の種類品位、粒度等に依つて決定せらるべきものと思惟するのである。故に燃料の粒度の細粒なるを尊びたるは點火容易混和の均等の點を餘り重大視して居るのではないかと思はれるのである。燃料の有する發熱量が如何に大であつても細粒のものは粗粒に比して所謂「火持ち」が永くないため結局熱的效果

が少い譯となる。されば作業上支障を起さない限りなるべく炭素質燃料は適度の粗粒を用ひ同時に裝入物中の水分の調節によつて加熱溫度、燃燒速度を調定するは作業を完全に遂行させる上から大いに研究の必要があるのではないかと思はれるのである。

(5) 混入炭素燃料を完全に燃燒せしめ得 従來燒結原料に添加される燃料は其種類も各所で相異して居るが、粉骸炭 (Coke Breeze) 無煙粉骸 (Anthracite fines) 鎔鑛爐瓦斯灰 (B. F. Flue Dust) 等は其主なるものゝ様である。而して此等の粒度も絶對的でなく常に不同があり勝で、粗粒状のものを混ずる事も敢て珍しくない。我製鐵所の例に就いて見るに當所の下等粉骸炭と稱して居るのは大體 3 分目(約 8mm) の圓筒篩を通過せしものであるが、時にこれ以上の粗粒を混入することがある。然し斯様な場合は今日迄配合量及び水分等の調節を行ひ多少不同はあつても其儘使用して居る。然し粗粒骸炭を混ずる程混合原料中の炭素質燃料は混合の均齊を缺ぐに至り、而も點火に際しては初めの間は如何にも完全に點火して居る如く見へても點火終了後次第に消火し完全に着火し難いか若くは粗粒粉骸炭の表面のみが燃焼し内部迄充分灰火せずに其儘殘つて居る。これは燃料經濟の點から考へても餘り感心したことではない。即ち原料に對する燃料といふものは單に其配合量のみに依つて其熱的效果を望み得るといふ譯のものでなくして、其粒度如何に依つて其效果は著しい相異を生ずるのである。然し斯の如き場合に此等裝入物中に適量の水分を添加する時は上述の不利を緩和し例へ粗粒状のものでも鑛層内の燃料を比較的完全に燃燒せしめ裝入物に對する熱的效果





塊狀に變せしめ、從來其使用を忌避され、又は顧みられざりしものを人爲的加工法に依つて優秀なる鐵製鍊用の原料に供するに在るは勿論であるが、更に一步進んで此等粉鑛中に含有する有害成分を除去し容易に製鍊の目的を達成し得る優良なる諸性質に富めるものとなすに在りと考へるのである。即ち此の點より考ふれば優秀なる燒結鑛としては大體次の如き諸性質を具有することが緊要である。

## 物理的

a. 気孔率に富む塊狀となす 鑛鑛爐内に於て通風を良好ならしめ還元瓦斯に對する接觸面を廣くし且つ受熱面を擴大す。

b. 耐壓力に富むものとす 爐内に於ける荷重に耐へ而も取扱ひの際破壊し難きものとす

## 化學的

a. 水分炭酸瓦斯の除去 鑛鑛爐内に於ける燃料の浪費を避く。

b. 脱硫作用 銑鐵中に入るを防ぐ。

c. 酸化作用 硫化鑛等にあつては適度の酸化を期すため。

d. 有害成分の除去 硫素、鹽素等其他の有害成分の除去。

又下方吸氣式燒結法に於ては概略次の各項に就いて注意するを必要と考へて居る。

- |     |  |
|-----|--|
| 點火前 | 1. 炭素質燃料(種類、粒度、發熱量、揮發分)<br>2. 粉鑛石(種類、粒度、脈石分)<br>3. 粉鑛石に對する燃料の配合割合<br>4. 混合原料中の水分(濕度)<br>5. 混合狀態(均齊混和)<br>6. 裝入狀態(パックの程度)<br>7. 點火狀態(瓦斯又は液體燃料等の發熱量)<br>8. 吸氣作用(フワンの迴轉數、負壓の狀態) |
| 點火後 | 9. 燒結溫度? } (高溫帶の移下速度、<br>10. 燒結時間 } (風速の程度)  |

即ち點火前に於ける前述 1 乃至 6 項が大體適當

に所理されて居るとするならば點火に依つて爾後は 8 乃至 10 項の狀態に左右され 結局塊成鑛の良否は自ら決定せらるべきものと思惟するのである。故に點火作業が完全に行はれ、而もエキゾストフワンが燒結に付する原料に對して順調なる吸氣作用の進行に連れて燒結作用を營むものとするならば要するに前述の如く加熱溫度の如何とその溫度に曝露する時間の狀態に依つて其成果を判定し得る事となり、燒結鑛の具備すべき物理、化學的諸性質は凡て上述各項を満足せしめ得るか否かに依つて其の品質は自ら決し得られるのである。就中前出 10 項の内最も變化甚しきものは 4 項に示す混合原料中の水分の程度にして、これが適否は直接間接に燒結作用に及ぼす影響大にして前述 B 項(1~6)に詳述したる諸項は實に燒結作業上最も注意を要し混合原料中の水分の影響の廣汎なるは本燒結作業上に於ては實に疑ふ餘地なきものと堅く信じて居る次第である。

而して下方吸氣式燒結法に於て最も得意とする脱硫、酸化の諸作用に關しては既に衆知の如く裝入物に對しては可及的短時間に而も高熱度を與へ充分外氣の通氣作用を營ましむるを要すとされて居るが、この條件を満足せしむるには特に混合原料中の水分の如何に俟つ所が渺くないと考へて居る。黃鐵鑛、黃銅鑛、含銅硫化鐵鑛等の如き硫化鑛の焙燒に關しては既往の文献並に筆者が實驗室的試験結果に徴するも大體 400°C 前後より急速的に酸化作用を開始し 500°C 乃至 600°C に於ては殆んど酸化を終了せる結果となつて居るが、外氣の通氣作用不活發なる場合に於ては低級の硫酸鹽を容易に構成し完全に脱硫の目的を達成することが出來ないのである。而して硫酸第一鐵、



がある。即ち燒結作業時に於ける水分の調節に當りてはこれ等兩者の狀態を熟慮の上(3)の水分に對し適當の調節を行ふことが最も安全策ではないかと思はれる。今日迄燒結作業時に於ける混入水分の調節は單に掌中に握り絞めて塊狀となし200~300mmの高さより落下せしめこの時數塊に割れる程度が一番適度であると云はれたるが如きは充分な鑑定方法とは稱し難いと思ふ。特に混合原料中に最初全く乾燥狀態の返粉鑛或は若干火氣を有するが如き原料(瓦斯灰の如きもの)を使用する場合には此等前後の状況を充分洞察し燒結裝置及び操業法等に就いても克く熟慮の上含水分を調節すべきであつて、單に實驗室的の結果を以て輕々にこれを決定し得べきものではあるまいと考へる。第13表は過去4ヶ年間に於ける製鐵所購買分析成績の平均水分の一斑を示したるもので硫酸滓、紫鑛の如く豫め焙燒行程を經ても氣孔性に富める粉鑛に在りては他の天然產の塊狀鐵鑛石に比して含水分が如何に高率であるかを窺知するこ

第13表 各種鐵鑛石中の水分、化合水  
(最近4ヶ年間の平均値)

種類	产地 又は納人	原鑛中の 水分	化合水
褐鐵鑛	載 殷 栗 " (塊)	8.20%	9.66%
	栗 " (粉)	7.58	10.05
赤鐵鑛	上 利 象 大 太 桃	12.53	10.10
	坡 原 山 治 平 沖	5.88	2.76
	鼻	1.00	0.71
	峯	7.71	3.84
	坂	4.96	3.32
磁鐵鑛	大	2.93	2.31
	小	4.14	2.08
硫酸滓	大	4.21	1.89
	小	1.91	0.90
	北陸人肥	10.94	
	藤田礦業	10.42	
	日本人肥	10.94	
紫鑛	三井物産	6.80	
	日本鋼管	13.14	
	日本窒素	14.03	
大阪製煉		15.99	

とが出来る。製鐵所に於ては上述の理由に基き毎日必ず一回各種原料鑛並に燃料、配合原料等に就て作業的に含水分の測定を行ひ、燒結作業遂行上の指針の一部としてこれ等の研究を續けて居るのである。(昭6.10.17)

(終り)